サロンの文芸活動

―皇后定子とその系流―（Ⅲ）

目加田さくを

○仁和中将御息所　（仁和中将御息所歌合）古今集

○班子女王サロン　（寛平御時后宮歌合）

あたりを、日本におけるサロンの嚆矢とみ、高松女院姝子内親王（平安朝歌合大成三九八）高松女院姝子歌合（承安五年・安元元年）一一七五年頃迄、約二百八十余年間、五十余のサロン中、最も優れた最高のサロンといえば、申すまでもなく、皇后定子サロンである。それは、僅か十一年間の後宮ぐらしであったが、サロンの主人公である皇后定子が、父系中関白家、母系高階家の血統を承けて、すぐれた遺伝的資質・才能をもち、和漢兼学・芸術的香気溢れる家庭環境・明朗・温和な父母の慈愛に育まれた稀にみる才媛であったことに帰因する。このことについては既に、拙著「東西女流文芸サロン――中宮定子とランヴィエ侯爵夫人」（笠間書院）で詳述した。

ここでは、定子の文才・学才・芸術的才幹について、少し丹念にながめてみよう。

定子（女御・中宮・皇后）サロン年表

正暦				
元	990	15才	一月入内　女御	
2	991	16才		
3	992	17才	円融院法養周忌	
4	993	18才	宮の五節	八三
			宮にはじめて	一七四
5	994	19才	関白殿二月	二五六
			三月ばかり物忌	二七八
			清涼殿の丑寅の隅	二八九
			上の御局の御簾の前	八六
長徳 元	995	20才	頭中将のそぞろなる	七五
			故殿御服の一ころ	五二

（岸上三巻本枕草子章段以下同）

五節の衣裳

四月十日道隆× 父関白

二	1000	25才	皇后 十二月十六日 皇后定子崩	故殿御ため に 一二六
長保 元	999	24才		無名といふ琵琶 八五
四	998	23才		殿などのおはしまさで 一三四
三	997	22才		返る年の 七六
二	996	21才		

御乳母の大輔命婦 二二〇
さてその左衛門陣 七五
頭の弁の 一二七
五月の御精進の程 九一
職におはしますころ 九二
五月ばかり一二八
大進生昌が家 六
二月つごもり 九八
三条の宮に二一九
辞世四首

一月 伊周・隆家の従者法皇を射る
四月 伊周大宰権帥・隆家出雲権守
五月 両人を播磨・但馬にとどむ
十月貴子×
伊周・隆家赦免

○定子サロンの白詩（その他漢詩文）受容の様相

六上の御局の御簾の前にて殿上人日一日琴笛ふき遊び暮らして大殿油まゐるほどに、まだ御格子はまゐらぬに大殿油さし出でたれば、戸のあきたるがあらはなれば、琵琶の御琴をたたざまに持たせたまへり。紅の御衣どもの言ふもよのつねなる袿また張りたるどもなどをあまた奉りて、いと黒うつややかなる琵琶に、御袖をうちかけてとらへさせたまへるだにめでたきに、そばより御顔のほどのいみじう白うめでたく、けざやかにてはづれさせたまへるは、たとふべきかたぞなきや。近くゐたまへる人にさしよりて「『なかばかくしたり』けんはえかくはあらざりけんかし。あれはただ人にこそはありけめ」といふを、道もなきにわけまゐりて申せば、笑はせたまひて「『別れ』は知りたりや」となん仰せらるるもいとをかし。（岸上氏校定三巻本枕草子 二ヨハ以下同）

と、

六三職におはしますころ、八月十余日の月明かき夜、右近の内侍に琵琶ひかせて端近くおはします。これかれ物言ひ、笑ひなどするに、廂の柱によりかかりて物も言はでさぶらへば、「など、かう音もせぬ。物言へ。さうざうしきに」と仰せらるれば、「ただ秋の月の心を見侍るなり」と申せば、「さも言ひつべし」と仰せらる。

とは、共に白氏文集巻十二感傷琵琶行の世界である。

○琵琶引並序

元和十年予左遷九江郡司馬明年秋送客湓浦口……曰琵琶行

潯陽江頭夜送客　楓葉荻花秋瑟瑟　主人下馬客在船　挙酒欲飲無管絃　醉不成歓慘将別　別時茫茫江浸月　忽聞水上琵琶声　主人忘帰客不発　尋聲闇問弾者誰　琵琶聲停欲語遅　移船相近邀相見　添酒回燈重開宴　千呼万喚始出來　猶抱二琵琶一半遮レ面　轉レ軸撥レ絃三両声　未成曲調先有情　絃絃掩抑声声思　似訴平生不得志　低眉信手続続弾　説盡心中無限事　軽攏慢撚抹復挑　初為霓裳後六幺　大絃嘈嘈如急雨　小絃切切如私語　嘈嘈切切錯雑弾　大珠小珠落玉盤　閒關鶯語花底滑　幽咽泉流水下灘　水泉冷澁絃凝絶　凝絶不レ通（ナトハシリ）声暫歇　別有幽愁闇恨生　此時無声勝有声　銀瓶乍破水漿迸　鉄騎突出刀鎗鳴　曲終収（テ）レ撥当レ心畫　四絃一声如裂帛　東船西舫悄無言　唯見江心秋月白　沈吟放レ撥挿二絃中一　整二頓衣裳一起斂レ容　自言本是京城女　家在二蝦蟆陵下一住　十三学得琵琶成　名属教坊第一部　曲罷曾教三善才服一　粧成毎被秋娘妬　五陵年少争纏頭　一曲紅綃不知数……

日も暮れかかる。格子を下ろす前に燈台をさし出したので、中宮は慌てて琵琶を立てて顔を隠す。その様子が、あまりにも美しく素晴らしいので、清少納言は感歎する。思わず、琵琶引の「猶抱琵琶半遮面」の妓女も、とても今の宮の御様子ほど素敵ではなかったでしょうねえ。あれは平民だったのでしょうものね」と傍の朋輩に洩らすと、その女房が、それに又感激。居並ぶ女房をかきわけ〳〵、中宮の御前までにじり出て報告。宮は陶然と琵琶行の世界に浸りながら、「別時茫々江浸月、忽聞水上琵琶声だったねえ、しってるかい」と応ずるのである。琵琶行を引きあいに出されて中宮はいささか動ずる風もない。実は、清少納言同様、中宮も、既に琵琶行の世界にいたのである。これは、正暦四年又は五年頃と推定される。中関白家全盛期で、所は弘徽殿の上御局。御局の前で殿上人達が一日中管絃をして暮らした華やかな後宮の夕である。別れはしりたりやといらへた定子にも、ゆったりした、幸せ一杯の気分が横溢している。ところが、九二の場合は、長徳三年か四年の八月で、父関白道隆・母貴子共に他界し、兄内大臣伊周・弟中納言隆家は花山院に対し、不敬罪で長徳二年流謫、中宮出家、三年四月に赦されたが、朝堂復帰は未だしかった、四面楚歌、逆境の時期である。今は、琵琶引の作者白楽天の、「左遷九江郡司馬」の身上にも、往年の名妓琵琶の名手として鳴らした身が老来、茶商の妻となって空船を守る中、はからずも白楽天に招ぜられて琵琶を弾ずる妓女の身の上にも、ひたと共感する不遇の身である。退出すべき里第をもたぬ定子は、中宮職を使う。上御局に伺候していない八月十余日の月明の夜、左大臣道長を憚かり、召したくとも召せぬ、上りたくとも上れぬ、一条帝と中宮定子の間に右近の内侍が中宮の前で弾く琵琶なのである。お気に入りの天皇付女房右近の内侍に琵琶を弾かせて、自身端近に出ていた中宮は、すだれごしに月を仰いで、何を憶っていたのであろうか。月の光はしめやかに流れ、亡き父関白、母貴子在世中のことどもがあれこれと思い浮んで切ない。中宮の心中を深くも察せず笑い興ずる女房達。一人ポツンと柱に倚って、だまっている清少納言。清少納言には中宮の胸中がわかっている。それを琵琶引の世界にうつしている。中宮が「などかう音もせぬ、ものいへさう〳〵しきに」と声をかける。「只見江心秋月白」に一寸手を入れて和風に答える。中宮は、「本当にそういいたいところだねえ」と応ずる。

中宮は、苦しく切ない現実を、琵琶引の世界、潯陽江頭につながれた船中、白楽天と友人と妓女との世界に、ふっと移行する。救われるのである。

三四 殿などのおはしまさで後、世の中に事出で来、さわがしうなりて、宮もまゐらせたまはず。小二条殿といふ所におはしますに…

右中将おはしまして物語りしたまふ。「今日宮にまゐりたりつれば、いみじう物こそあはれなりつれ。女房の装束、裳、唐衣、をりにあひ、たゆまでさぶらふかな。御簾のそばのあきたりつるより見入れつれば八九人ばかり朽葉の唐衣、薄色の裳に紫苑、萩などをかしうてゐ並みたりつるかな。御前の草のいと繁きを、「などか。かきはらはせてこそ」と言ひつれば「ことさらに露置かせて御覧ずとて」と宰相の君の声にていらへつるがをかしうも覚えつるかな……あはれなりつる所のさまかな。台の前に植ゑられたりける牡丹などのをかしきこと」などのたまふ……

これは、中宮定子が逆境にあって逼塞中も、凛とした気位と聡明さとをもって、自身はもとより、女房達の衣裳にいたる迄、見事に調えさせ、中宮御所の品位を持して寸分の油断もなく暮らしている様に、訪れた廷臣が感歎したものである。その中でも、わざと庭の草を刈らせずに露を置かせてみようという、奥床しく、気丈な見識は、「をりてみばおちぞしぬへき秋はきの枝もとををにおけるしらつゆ」「つながらをりてかざさむ菊の花おいせぬ秋の久しかるべく」といった、みやびやかな和歌の世界の教養だけからはもたらされぬ、李豊の女、李勢の妹に通ずる気魄がある。漢文芸、ことに白詩の世界に培かわれた見識である。庭には唐わたりの牡丹がある。

白氏 文集

秋題牡丹叢

晩叢白露夕　衰葉涼風朝　紅艶久已歇　碧芳今亦銷　幽人坐相対　心事共蕭條（巻九）

新秋

西風飄一葉、庭前颯已涼、風池明月水、衰蓮白露房、其奈江南夜、緜緜自此長（巻九）

酬三夢得早秋夜対レ月見レ寄

吾衰寡二情趣一　君病懶二経過一　其三奈西楼上新秋明月何一　庭蕪凄白露　池色澹金波　況是初長夜　東城砧杵多（巻二十四）

酬三夢得暮秋晴夜対レ月相憶一

霽月光如レ練　盈レ庭復満レ池　秋深無レ熱後夜浅　未寒時、露葉團二荒菊一　風枝落病梨　相思懶相訪　應三是各年衰一（巻二十四）

東陂秋意寄元八

寥落野陂畔　独行思有餘　秋荷病葉上　白露大如珠　忽憶同賞地　曲江南北隅　秋池少遊客　唯我與君俱　啼蛩隠紅蓼　瘦馬蹋青蕪　当時與今日　俱是暮秋初　節物苦相似　時景亦無餘　唯有人分散　経年不得書（巻六）

秋齋

晨起秋齋冷　蕭條称病容　清風両鬢竹　白露一庭松　阮籍謀レ身拙　稽康向レ事慵　生涯別有處　浩気在心胸（巻二十五）

秋晩

籬菊花稀砌桐落　樹陰離離日色薄　單幕疎簾貧寂寞　涼風冷露秋蕭索　光陰流転忽已晩　顔色凋残不如昨　萊妻臥病月明時　不搗寒衣

空搗薬（巻十六）

江楼早秋

南國雖多湿　秋來亦不遲　湖光朝霽後　竹気晩涼時　楼閣宜佳客
江山入好詩　清風水蘋葉　白露木蘭枝…（巻十六）

月三日作

露白月微明　天涼景物清　草頭珠顆冷　楼角玉鉤生　気爽衣裳健
風疎砧杵鳴　夜衾香有レ思　秋簟冷無情　夢短眠頻覚　宵長起暫行
燭凝臨レ暁影　虫怨欲寒声　槿老花先盡　蓮凋子始成　四時無二了日一
何用嘆二衰栄一（巻三十三）

などが、定子の念頭にあって、「ことさらに露おかせて……」と、どうせ悲運の后、庭の草も生い茂り、もいいではないか、荒蕪の庭におく白露、白楽天や劉夢得と同じ世界、「何用歎衰栄」と、いなおった観すらあるのである。時に中宮二十三四才。

三六 故殿の御ために月ごとの十日、経仏など供養せさせたまひしを、九月十日、職の御曹司にてせさせたまふ。上達部、殿上人いとおほかり。清範、講師にて説くこと、はたいと悲しければ、ことに物のあはれ深かるまじき若き人々、みな泣くめり。果てて酒飲み、詩誦じなどするに、頭の中将斉信の君の、「月秋と期して身いづくか」といふことをうち出だしたまへりし、はたいみじうめでたし。いかで、さは思ひ出でたまひけん。おはします所にわけまゐるほどに、立ち出でさせたまひて、「めでたしな、いみじう今日の料に言ひたりけることにこそあれ」とのたまはすれば、「それ啓しにとて、物見さして、まゐり侍りつるなり。なほいとめでたくこそ覚え侍りつれ」と啓すれば……

これは、本朝文粋巻十四

為謙徳公修報恩「修」善願文　菅三品

弟子某伊尹帰命稽首……嗟吁人命不レ定。吾生難レ知。「彼金谷醉花之地。花毎レ春匂。而主不レ帰。南楼翫レ月之人。月与レ秋期而身何去」……

である。和漢朗詠集は「　」の部を採る。実はこの「月与秋期」は白氏文集巻二十六

対琴待月

竹院新晴夜　松牕未臥時　共琴為二老伴一　與レ月有二秋期一　玉軫臨レ風久　金波出レ霧遅　幽音待清景　唯是我心知

を援引した詠作である。中宮は、もとより此の詩を知っている。月毎の供養、法会が終り、おひらきの酒宴の席で、斉信が菅三品の「南楼翫月之人月与秋期而身何去」を朗誦しはじめる。中宮は感動した。まるで今日の法会の為に、父の為に詠まれた詩ではないか！じっとしていられず、「たちいで」た。同じ時、清少納言も、そう感じて感動し、じっとしていられず、多勢の中をわけ入って中宮に申しあげようとする。二人が、全く同じ行動を同時におこしたのである。詩に対する受容の深さである。

三七 雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語りなどして、集まりさぶらふに、「少納言よ、香爐峯の雪いかならん」と仰せらるれば、御格子あげさせて、御簾を高くあげたれば笑はせたまふ。人々も「さることは知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。なほ、この宮の人にはさべきなめり」と言ふ。

これは、思いがけず大雪が降り、夜が明けてみると、庭一面銀世界、女房達は、「おお寒む」とばかりに御格子もあげず、いそいで長火鉢一杯に火をおこして、皆集まってはしゃいでいる。中宮は、すっと、白詩の世界に入る。白氏文集巻十六

香爐峯下新卜山居草堂初成偶題東壁五首の一首

日高睡足猶慵起　小閣重裘不怕寒　遺愛寺鐘欹枕聴　香爐峯雪撥簾看　匡廬便是逃名地　司馬仍為送老官　心泰身寧是帰處　故郷何独在長安ノミニ

「少納言よ香爐峯の雪いかならん」は、清少納言も、恐らくこの雪で、あの白詩、香爐峯の雪を想うているであろう、との中宮の言である。果せるかな、間髪を入れず、御格子をあげさせ簾を高くあげた――（日本の簾は撥するわけにいかぬ。高く捲きあげるよりしかたがないのだ。）清少納言も香爐峯の詩を想っていたのであった。雪をみても、琵琶、詩の朗詠を聞いても、何かにつけて、ややともすれば、中宮と清少納言とは共に、白氏文集の世界に心を浮遊させているのである。そういう女主人のサロンであるから、「わかってもらえる！」との確信から、廷臣たちも集ってきては白詩問答をするのである。

玉頭中将のすずろなるそら言を聞きて……青き薄様にいと清げに書きたまへり……。

蘭省花時錦帳下

と書きて、「末はいかに、末はいかに」とあるを、いかにかはすべからん。ⓧ御前おはしまさば御覧ぜさすべきを、これが末を知り顔にたどたどしき真名書きたらんもいと見苦しと思ひまはすほどもなく責めまどはせば、ただその奥に、炭櫃に消え炭のあるして

草の庵を誰かたづねむ

と書きつけて取らせつれど、また返事も言はず……

これは、中傷をきいて清少納言を誤解した頭中将斉信が、実否を糺そうと清少納言を白詩で試めそうとしたものである。その中傷とは、清少納言の知ったかぶりは底の浅いもので、白氏文集なんざ、よんちや、いまいよ……のたぐいの悪口、たとえば後輩の紫式部が妬ましげに記しつけた「清少納言こそしたり顔にいみじう侍りける人さばかり賢しだち真名書き散らして侍る程もよく見ればまだいと堪へぬこと多かり云々」のような類のことでもあったろうか。白詩の問題を出して、その返答如何で「こよひあしともよしとも定めきりてやみなんかし」「ただ、この返り事にしたがひて、こかげをしふみし、すべてさる者ありきとだに思はじ」と、「みな言ひあはせたりし」問題であったのだから。ところが、こんな問題は、清少納言には、へいちゃら、である。あんまり容易で、素直に答を、「廬山雨夜草庵中」と書いて渡したのでは、曲がなさすぎる、というのである。そこで、これを和歌の下句にしたてて、今度は、此方から斉信に和歌の上句を要求したのである。

蘭省花時錦帳下↓廬山雨夜草庵中（清少納言）

↑草の庵を誰かたづねむ（斉信）

ところが、清少納言の逆襲に、斉信をはじめいあわせた廷臣一同、ぐうの音も出ぬ。夜中かかって上句が出来なかった。完敗である。その事は一条帝の耳にも入る。帝は中宮にものがたる。「をのこどもみな扇にかきてなんもたる」と。そして、中宮は早速清少納言を

召して、よろこぶ。定子サロン、清少納言の命名は殿上になりひびく。白氏文集巻十七

　廬山草堂夜雨独宿寄牛二李七庾三十二員外

丹霄攜手三君子　白髪垂頭一病翁「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」終身膠漆心応在　半路雲泥迹不同　唯有無生三昧観　栄枯一照両成空

　倭漢朗詠集に「　」の部を採る

　去返る年の二月二十余日……

「西の京といふ所のあはれなりつる事、もろともに見る人のあらましかばとなん覚えつる。垣などもみなふりて苔生ひてなん」などかたりつれば、宰相の君の「瓦の松はありつや」といらへたるに、いみじうめでて『西のかた都門を去れることいくばくの地ぞ』と口ずさみつること」など、かしがましきまで言ひしこそをかしかりしか。

これは清少納言に次ぐ才媛宰相君の名応答である。白氏文集巻四

　驪宮高

高高驪山上有宮　朱楼紫殿三四重　遅遅兮春日（ニハ）玉甃暖兮温泉溢

嫋嫋兮秋風山蟬鳴兮宮樹紅　翠華不來歳月久　墻有レ衣兮瓦有レ松

吾君在位已五載（ナルニ）何不一幸於其中　西去都門幾多地（ソノ）……

　頭中将斉信は清少納言流の応答をする宰相の君の「白詩」通ぶりに、すっかり感歎、上機嫌で「西去都門……」と朗誦しはじめる。訪れる廷臣らと共に白詩の世界に浸る定子サロンの華やかな畫さがりである。

　六二月つごもりごろに風いたう吹きて空いみじう黒きに、雪すこしうち散りたるほど、黒戸に主殿司来て、「かうてさぶらふ」と言へば、よりたるに、「これ、公任の宰相殿の」とてあるを、見れば、懐紙に

A　すこし春ある心地こそすれ

とあるは、げにけふのけしきにいとようあひたる、これがもとはいかでつくべからんと思ひわづらひぬ。「誰々か」と問へば「それそれ」といふ。みないと恥づかしき中に、宰相の御いらへをいかでかことなしびにいひ出でんと心ひとつに苦しきを、㋐御前に御覧ぜさせんとすれど、上のおはしましておほとのごもりたり。主殿司は「とくとく」と言ふ。げにおそうさへあらんはいととりどころなければ、さはれとて

B　空寒み花にまがへて散る雪に

と、わななくわななく書きてとらせて、いかに思ふらん、わびし。これがことを聞かばやと思ふに、そしられたらば聞かじと覚ゆるを、「俊賢の宰相など、『なほ、内侍に奏してなさん』となんさだめたまひし」とばかりぞ、左兵衛の督の中将におはせし、語りたまひし。

これは和漢兼才の公任が、定子サロンへの働らきかけである。白氏文集を援引しての

　南秦雪

B　三時雲冷多飛雪　二月山寒少有春

BA　我思旧事猶惆帳（巻十四）

公任の念頭に、Aがあり、和歌の下句にしたてて贈った。「雪すこしうち散りたるほど」であったので、清少納言は、Bに「花」を

加えて上句としたものである。いささか自信はあったが公任方の反応がわからない。それとなくきいてみると、俊賢（参議）が褒めてそんな学才ある人物なら、内侍に推薦しようといっている、という噂をきいて、ホッとした、「わかってくれたわ――白詩で応じた事――」というのである。内侍は内侍宣といって奏請伝宣を掌るから学才を必要とする女性官僚であった。

公任集には

人に春のはじめなり
すこし春ある心ちこそすれ
とのたまひければ
吹そむる風もぬるまぬ山里は

を納めるが、白詩に出典をもつ下句に対しては、清少納言の上句の方が勝れている。定子サロンの女房は、白詩のどこから採って詠みかけても、問いかけても、即坐に見事に切りかえす、しかも、さりげなく、優美に、謙遜のていで。実力があったという事である。

ここで注目すべきは、ここⓎでも又、ⓧ蘭省花時、の場合と同様に、返事をさて、どうしたものか、まづ、中宮に相談しようとする態度、それをⓧⓎとはっきり明文化した事実である。つまり、中宮定子が、その相談にのれる人物、清少納言にまさるとも劣らぬ学才・歌才・センスをそなえていた、という事実の証拠である。堂々たるサロンの主人公という事である。

一三一 故殿の御服のころ六月の晦日の日……

宰相中将斉信、宣方の中将、道方の少納言などまゐりたまへるに、人々出でて物など言ふに、ついでもなく「明日はいかなることをか」といふに、いささか思ひまはし、とどこほりもなく、「『人間の四月』をこそは」といらへたまへるがいみじうをかしきこそ……この四月の一日ごろ……白氏文集巻十六

大林寺桃花
人間四月芳菲盡　山寺桃花始盛開　長恨春帰（ミキ）無二覓（リテ）處一（キヲル）　不レ知（シラ）轉（タ）入此中來

これは先人の指摘のように三月盡日とみるべきで、明日（四月一日）はいかなることをか……」であろう。前年四月十一日関白道隆薨であったから、それを芳菲盡に美しく悲しくシムボライズしたために、清少納言に絶讃されたわけで、定子サロンに集う貴公子達も、白詩の世界で応答する、つまり、定子サロンの男女ともに白氏文集の世界に生きていたのである。

一三二 関白殿、二月二十一日に法興院の積善寺という御堂にて……

さて八九日のほどにまかづるを、「いますこし近うなりてを」など仰せらるれど出でぬ。いみじうつねよりものどかに照りたる昼つかた、「花の心開けざるや。いかに、いかに」とのたまはせたれば、「秋はまだしく侍れど、夜に九度のぼる心地なんし侍る」と聞えさせつ。……

これは、白氏文集巻十二感傷

○長相思

九月西風興　月冷霜華凝　思君秋夜長　一夜魂九升
草折花心開（ヒラケ）　思君春日遲　一日腸九廻　妾住洛橋北　君住洛橋南
十五即相識　今年二十三　有如女蘿草　生在松之側　蔓短枝苦高
縈廻（スレトモル）上不（コトヲ）得　人言人有願　願至天必成　願作遠方獸　步步比

肩行　願作深山木　枝枝連理生

正暦五年二月八九日の事である。清少納言は前年十一月出仕。宮仕はじめの頃である。中関白全盛期、幸せ一杯の中宮は、御気に入りの清少納言を、いつも傍に侍らせておきたいので、退出をなか〳〵許そうとしない。むりに退出した清少納言に、中宮が白詩で「花の心開けざるや、君を憶うて春日長し」とよびかける。いみじうつねよりのどかに照りたる昼つかた、にである。早速、清少は同じ詩で「思君秋夜長」秋ではございませんが、一夜魂九升」のおもいでございます、中宮様をおしたいして一夜に九度も御前に上りたいおもいです、と答える。のどかな春昼、白詩の世界に二人は遊びながら、深い信頼の情をたしかめあっているのである。

○皇后定子の歌

制作年次はほぼ次のようであろうか。

正暦三年二月

これをだにかたみと思ふに都には葉がへやしつる椎柴の袖　一二九段　後拾遺・一条天皇（天皇と合作か）

正暦四年

①いかにしていかにしらまし偽をそらにただすの神なかりせば　一七四段

宮にはじめてまゐるたる頃……「ものなど仰せられて「われをば思ふや」と問はせたまふ。御いらへに「いかがは」と啓するにあはせて、台盤所のかたに鼻をいと高うひたれば、「あな心憂、そら言を言ふなりけり、よしよし」とて奥へいらせたまひぬ。いかでかそら言にはあらん……明けぬれば下りたる、すなはち、浅緑なる薄様に艶なる文を「これ」とて来たる、あけてみれば中宮からの、からかいの歌である。清少納言は

うすさこそそれにもよらぬはなゆゑにうき身のほどをみるぞわびしき

なほこれば かり啓し直させたまへ……

と必死で使に懇願した。

正暦四年三月

②いかにしてすぎにしかたを過しけんくらしわづらふ昨日けふかな　二七八段　千載・皇后定子

三月ばかり物忌しにとてかりそめなる所に人の家に行きたれば……又同じ物忌しにさやうの所に出で来るに二日といふ日の昼つかた……

定子から賜った歌である。これに清少納言は感激して、うっかり

雲の上も暮らしかねける春の日を所がらともながめけるかな

わたくしには『今宵のほども少将にやなり侍らんとすらん』とて暁にまゐりたれば

「昨日の返し『かねける』いとにくし。いみじうそしりき」と仰せらるる、いとわびし。まことにさることなり。

清少納言は、中宮に「くらしかねける」という措辞が妥当でないと非難される。18才の定子が28才？の清少納言に、である。中宮の歌才のしたたかさ、思うべきである。

長徳二年四月

③雲の波煙の浪のたちへだてあひみんことのかたくもあるかな　（栄華）　（栄華）　（続古今）

長徳元年四月十日、関白道隆は四三才の若さで薨じた。道兼も五月に逝去。道長が右大臣となり、内大臣伊周、中納言隆家は圧迫され、両者間の軋轢が激しくなった。翌二年正月、伊周、隆家の従者が、花山院を射るという不敬事件が出来。四月には伊周を太宰権帥、隆家を出雲権守に貶。後、ゆるして、それぞれ、播磨、但馬に留めしめる事となったが、兄弟の出発後、中宮は鋏をとって落飾。十月には貴子逝去という事態にたちいたった。この兄弟貶謫の事件の経緯は栄華物語「浦〳〵の別」であはれふかく詳しく物語られ、姉妹の歌があげられる。

「春宮よりいかなる御消息か有けん、淑景舎より聞えさせ給

秋霧の絶間〳〵を見渡せば旅にたゞよふ人ぞ悲しき

はるかなる御有様を覚しやらせ給て中宮

雲の波煙の浪をたちへだてあひみむことの遥なるかな

とひとりして覚されけり」　　浦〳〵の別れ

縹渺たる景に悲別の想いが漂う。みごとな形成である。ここに、雲の波、煙の波、たちへだて、あひみむことの遥か、の語に注目してみよう。まず　煙の波、雲の波という語は、和歌の世界では稀なことばであった。

○煙の波

定子以前には用例がない。定子の創始である。栄華物語、続古今に皇后定子詠として本歌をのせるまで、少くとも正続国歌大観の索引に見当らぬ。ずっと後世、本歌をうけて、新続古今に後八条入道前内大臣、増鏡に亀山天皇の「雲のなみ、煙の浪」が詠まれた。

○雲の波

万葉集の人麿歌に一首1068「雲之波」が出る外、これもまた定子以前には見当らぬ。正続国歌大観索引になし。拾遺集488の「雲の波たち」は万葉集の人麿歌である。後掲のように、煙波は白氏文集に多いが、雲波はなく、雲濤一例である。大漢和では、雲波の例に李商隠と無可の詩をあげる。烟(煙)雲と熟して用いるし、日本の経国集でも、巻一滋貞主の（重陽節神泉苑賦秋可哀）秋可哀兮……烟断崇嶺　雲愁幽谿……対句に用いるように、甚だ関連のある想念であり語である。人麿が「詠天」と題して巻七巻頭歌

天海丹雲之波立月船星之林丹榜隠所見

と詠んだのは空を天の海と見たて、雲の波、月の船、星の林と幻想的な美の世界をつくりあげたが、これは巻十の七夕歌の幻想の世界、一九九六～二〇三三、又、二〇三四～二〇九三、ことに、二〇四四天漢霧立度牽星之檝音所聞夜深往、等の世界と無関係ではない。つまり、中国オリジンの七夕伝説の世界で生まれた発想である、ということである。人麿歌として拾遺集にとられている程、人口に膾炙していたから、人麿の雲の波という表現は、定子も知っていたとおもわれる。白詩で習熟している煙波に雲波をつづけた、この「雲の波、煙の波」という表現も定子の創始である。（因みに扶桑集には江相公の煙浪雲山がある。）

扶桑集

書懐呈渤海裴大使　　江相公

煙浪雲山路幾重……

蕃客贈答　　藤雅量

煙波淼茫雲樹微

煙波、はもとより、次にかかげる白詩の世界は、全く定子の住む世界と同質である。というより、定子は、自己の感懐を白詩の世界と同質にした、というべきであろう。

寄江南兄弟

(a)分散骨肉恋。趨馳名利牽。一奔塵埃馬。一汎風波船。忽憶分レ手時。惻然秋風前。別来朝復夕。積レ日成二七年一。花落城中池。春深江上天。登レ楼東南望。(c)鳥滅煙蒼然。相去復幾許。道理近三千。平地猶難レ見。況乃隔二山川一。

秋題牡丹叢（前出、同じ巻九であることに注目）

(e)晩叢白露夕　衰葉涙風朝　紅艶久已歇　碧芳今亦銷　幽人坐相対心事共蕭條（巻九）

将レ之二饒州一江浦夜泊

明月満深浦　愁人独臥舟……　憂来起長望　但見江水流　雲樹謬蒼蒼　煙波淡悠悠……（巻九）

秋江送客

秋鴻次第過。哀猿朝夕聞。是日孤舟客。此地亦離群。濛濛潤衣雨。漠漠冒帆雲。不醉潯陽酒。煙波愁殺人（巻九）

南湖晩秋

八月白露降、湖中水芳老、旦夕秋風多、(i)衰荷半傾倒、手攀青楓樹、足蹋黄蘆草。慘淡老容顔。零落秋懐抱。有レ兄在二淮楚一。有レ弟在二蜀道一。万里何時来、煙波白浩浩。（巻十）

八月十五日夜禁中独直対月憶二元九一

銀台金闕夕沈沈　独宿相思在翰林　三五夜中新月色　二千里外故人心　渚宮東面煙波冷　浴殿西頭鐘漏深　猶恐清光不二同見一　江陵卑濕足秋陰（巻十四）

(a)(b)(c)(d)(i)(j)は、定子の憶いにピタリとあてはまる詩句ではないか。(e)(f)前掲。(g)(h)(k)は煙波の出典。(h)(k)これもまた、そのまま定子の感懐である。

雲波の例は白氏文集に見当らぬ。雲濤一例。（九大竹村氏よりおしらせをうけた。）

李商隠　全唐詩五三九

西溪

帳望西溪水　潺湲奈尓何　不驚春物少　只覚夕陽多　色染妖韶柳光含窈窕蘿　人間従到海　天上莫為河　鳳女弾瑶瑟　龍孫撼玉珂京華他夜夢　好好寄雲波

無可

官池上

廻レ疏城闕内、寒瀉出二雲波一

用例

○けふりの波　定子以前になし。（275栄華物語（前掲）（続古今842）に定子詠として初見。）

○雲の波、煙の波という表現も、定子がはじめて創り出した。

儀同三司の遠き所に侍りけるにつかはしける　一条院皇后宮

842 雲の波煙の波の立ちへだてあひみむことの難くもあるかな（続古今）

これをうけて以後、雲の波煙の波がよまれることとなった。

雑の歌の中に　後八条入道前内大臣

1826 雲のなみ烟の浪もみえわかず塩やく浦のゆふくれのそら　（新続古今）

増鏡に亀山天皇

雲の波けぶりの波を分てけり行くすゑとほき君がみよとて

○雲の波（定子以前）

1068 詠天

天海丹雲之波立、月船星之林丹榜隠所見（万葉集巻七）（右一首柿本朝臣人麿之歌集出）

人麿

488 詠天

空の海に雲の波たち月の舟星のはやしにこぎかへるみゆ　（拾遺集）

雲の波（定子以後）

水上月といへる心をよめる　前斎院六条

198 雲の波かゝらぬさ夜の月影をきよ瀧川に映してぞみる（金葉集）

旅の歌の中に　九条左大臣女

1214 かへりみるわが故郷のくもの波烟もとほし八重のしほ風（玉葉）

旅の御歌の中に　後鳥羽院御製

887 けふは又雲の波より出でにけり昨日の暮の山のはの月（続古今）

中納言家茂の家の　歌合に刑部卿範兼

350 天の河雲の波なき秋の夜はながるゝ月のかげぞのどけき　（新後撰）

百首の歌奉りし時　権中納言為藤

295 天の河まさるみかさは知らねども雲の波たつ五月雨のそら　（後千載）

前右衛門督為盛

638 よそに行く雲の波まて氷りけり　冴ゆる霜夜のつきの光に　（新続古今）

雑の歌の中に　後八条入道前内大臣

1826 雲のなみ烟のなみもみえわかず塩やく浦のゆふぐれの空　（新続古今）

御乳母の大輔の命婦日向へ下るに賜はする扇どもの中に、片つかたは日いとうららかにさしたる田舎の館などおほくして、いま片つかたは京のさるべき所にて雨いみじう降りたるに

④あかねさす日に向ひても思ひ出でよ都は晴れぬながめすらんと

(a)御手にて書かせたまへる、いみじうあはれなり。さる君を見おきたてまつりてこそえ行くまじけれ

餞別の扇の表裏に、日のうららかに照る日向の国守邸とおぼしき館の景と、雨の御所の景を画かせ、それに自ら筆をおろした詠である。日向が巧みに扱いなされており、(a)しみ〴〵としたこまやかな情愛が漂う扇。(b)と清少納言が感動する筈である。この才気と情、定子のもち味である。このような芸当の出来る後宮は稀れであったろう。才気は微子にもある。しかし、乳母、女房らへよせるこまやかな情迄求めるとなると、定子の外にはいない。これは長徳四年頃日向守であった姓未詳「忠信」の妻か、長徳三、四年頃の詠か。

⑤元輔が後といはるゝ君しもや今宵の歌にはづれてはをる

これは次の「五月の御精進のほど」九一段で、中宮が、ほととぎの歌一首もよまずに帰還した清少納言一行を叱ったが、「『いまも

などかその行きたりしかぎりの人どもにていはざらん。されどさせじと思ふにこそ』とものしげなる御けしき」であったが、どうにも詠めず、困りぬいた二日後、紙に

⑥下蕨こそ恋ひしかりけれ

とかいて、「もといへ」と仰せられた。清少が、「ほととぎすたづねてききし声よりも」

とうつかり付けて、大失敗、失笑をかったが、その時、しみ〴〵とした清少納言の繰り言をきいて、頭脳明晰な定子が、清少納言は歌才においては世の常であること、彼女の才能は外の分野にある事を機敏に悟り、「さらば、ただ心にまかせよ、我はよめともいはじ」とおゆるしになった後の、おひやかしである。

元輔が後といはれぬ身なりせば今宵の歌をまづぞよまましと啓したのである。⑨の連歌と共に、お気に入りの才媛清少を10才年下の中宮がからかいの呼びかけである。歌才における中宮の優位、愛情がくみとれる。

屏風の絵にしほがまの浦かきて侍りけるを　一条院皇后宮

⑦いにしへのあまや煙となりぬらむ人めもみえぬしほがまのうら

（新古今）

何か不気味な、女性の歌とも思えぬ鬼気迫る発想である。温和な人柄のうちに冷徹な理性を思わせる。

⑧山近き入相の鐘の声ごとに恋ふる心の数はしるらむ

清水寺に参籠中の清少納言へ「唐の紙の赤みたるに草にて」かかれた御文である。中宮のしめやかな心が伝わる

三八　細殿に便なき人なん、暁に笠さして出でけると言ひ出でたるを、よく聞けば、わが上なりけり……上より御文もてきて「返事ただいま」と仰せられたり……

大笠の絵をかきて人は見えず、ただ手のかぎり笠をとらへさせて下に

⑨□□山の端あけし朝より

とかかせたまへり……と紙に、

雨をいみじう降らせて、下に

□□ならぬ名のたちにけるかな

さてや濡れ衣にはなり侍らむ

と啓したれば、右近の内侍などにかたらせたまひて、笑はせたまひけり

中宮が、「絵」をかいて、つづけて「上句」をかき、連歌の「下句と絵」を要求した。清少の応答が中宮の満足(Y)のいくものであったから、中宮は、天皇附女房右近内侍に語って(X)喧伝したのである。中宮はこの見事な清少納言の回答――清少納言ならではの才能、筆者のいう「芸術的応答動作」―「呉竹」をみて「おいこの君にこそは、「香炉峯の雪いかならむ」をきいて簾を高くあげる」等々――を天皇の、廷臣の耳に入れ、清少を華やかにもりたてようとする、サロンの主人公が自ら、メムバーの才能を引き出し、情報喧伝役までつとめるのである。定子は即興の連歌二。しかも凝った絵文字入り連歌である。定子の「絵」の才能も並々ならぬものである事が、又証せられた。

三条の宮におはしますころ……

⑩みな人の花や蝶やといそぐ日もわが心をば君ぞ知りける

この紙の端を引き破らせたまひて書かせたまへる、いとめでたし

長保二年の五月の詠か。前年道長女彰子入内。彰子は中宮となり、定子は皇后となった。華やかな彰子の邸宅には追従の人々が集い、花や蝶やと賑やかな日々である。定子の仮住居、生昌三条宅は、しめやかに薬玉のいとなみをしている。清少納言が、青刺を硯箱の蓋に青い薄様をしいて、「ませごしにさぶらふ」と、「まゐらせる」、その心づくしに対して、中宮は、心の中をさらけ出して訴える。お互を最もよく理解しあい、最も信頼しあうその見きわめ、が確実に出来たのが定子であった。

長保二年十二月、辞世がのこされる。

一条院の御時皇后宮かくれたまひてのち帳のかたびらのひもにむすびつけられたるふみをみつけたりければ、うちにも御覧ぜさせよとおぼしがほにうたみつかきつけられたりけるなかに

⑪夜もすがらちぎりしことをわすれずは恋ひむ涙の色ぞゆかしき

⑫しる人もなきわかれぢにいまはとて心ぼそくもいそぎたつかな

（後拾遺）

栄華物語 巻第七　とりべ野

宮は御手習をさせ給て、御丁の紐に結び付けさせ給へりけるを、今ぞ帥殿、御方〳〵など取りて見給て、「この度は限のたびぞ。其の後すべきやう」などかゝせ給へり。いみじうあはれなる御手習どもの、「内わたりの御覧じ聞しめすやうなどや」とおぼしけるにやとぞ見ゆる。

⑪よもすがら……　又

⑫知る人もなき別路に……　又

⑬煙とも雲ともならぬ身なりとも草葉の露をそれと眺めよ

などあはれなることゞも多くかかせ給へり……宮は今年ぞ廿五になら せ給うける……なやみ給ひけるころまくらのつつみがみにかきつけられける　一条院皇后宮

⑭なきとこにまくらとまらばたれかみてつもらん塵をうちもはらはん　(X)

この歌の常套的にもなった表現(X)には、しば〳〵出る白氏文集の、たとえば巻九感傷あたりの影響もある。

秋夕

葉声落如雨、月色白似霜、夜深方独臥、誰為拂塵牀

定子の遺詠は以上十四首。⑪⑫⑬⑭の哀切な詠を目にした一条帝、伊周、隆家の悲歎は栄華物語に縷々ものがたられる。葬送の日、宮中で一人野辺送りを思いやる一条帝は

○野辺までに心ばかりは通へども我が行幸とも知らずやあるらむ

と詠む。その日は雪が降っていた。兄弟達は

○誰もみな消えのこるべき身ならねどゆき隠れぬる君ぞ恋しき　伊周

○白雪の降りつむ野辺は跡絶えていづくをはかと君を尋ねむ　隆家

○故里にゆきも帰らで君ともに同じ野辺にてやがて消えなん　隆円

お坊ちゃん育ちで気の弱い兄伊周、豪胆な弟隆家、甘えん坊の弟の僧隆円、それ〴〵が号泣の詠である。読む者の魂をゆるがせるこの四人の挽歌は、このような見事な挽歌を形成させないではおかぬものが定子の生にあったのである。